

川柳 さいたま

第56回 さいたま誌上大会号



睡蓮

2020年（令和2年）
7月号（No.728）

日川協加盟

巻頭言

羅生門とくろく

願法みつる

映画「羅生門」のリメイク版を観た。昭和二十五年製作と言うから世は戦後の米軍占領下。大映の永田社長は意味が「わからん」と評価。国際映画祭にも出品させなかつたとか。巡って翌年、国際映画祭で金獅子賞を受賞するや世は騒然。「わからん」ことが起きたのだ。

登場の僧侶と柚人が終始呟く、「わからん」の無常さが、タン、タタタ、タン、タンという繰り返されるポレロ調の曲で、観客の苛立ちを煽っていた。人間とはわからないものであるという心理劇。誰の言が実なのか虚なのか、混沌の平安の時代。それはコロナ禍で隣人を信用できない現代社会にも似ている。文明のサイクルかも知れない。

自分が偽善者ではないと言い切れる人は居ないだろう。しかしそれにしてもである。人々が示す態度のなんと我利我利であることか。自由を主張できる現代人の我が儘さ。自肅要請下の場所に、群れ集まる我が儘な国民？の姿を、複雑な思いで飲み込んだ時節だった。生活や家庭を犠牲にしながら、自ら罹患の危険に晒されつつ疲労困憊している医療従事者。その傍らで、万民はそれなりの身の処し方に切歯扼腕しつつ、日々の風向きに翻弄された。世間に、「わからん」の疑問符が有形無形に飛散した。川柳人もその渦中にある。各柳誌を拝見する限り、コロナ禍で真面目に（？）右往左往する句が多かった。

日日是好

願法みつる

なんの意ぞ余命の時間有り余る

地球ってピンポン球の軽さかも

親方は日の丸だった輪転機

意のままにならぬ自然と寅次郎

飽食の後ろに鬼の赤い口